様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月２０日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19530775
研究課題名（和文）　ＰＩＳＡ型「読解力」を乗り超えるための「文章吟味力」の指導に関する臨床的研究
研究課題名（英文）　Research on the teaching of “critical reading skills”: Aiming to go beyond PISA type reading skills

研究代表者：阿部　昇（ABE NOBORU）
秋田大学・教育文化学部・教授　　・
研究者番号：80323129

研究成果の概要（和文）：
ＰＩＳＡの「読解力」問題の分析・検討を行い、それに対応しつつそれを乗り超える「文章吟味力」を核とした読解力に関して小学校高学年→中学校→高等学校の教科内容の概要を系統的に解明した。また、その教科内容を子どもたちに身につけさせる教育方法について、各学年段階に対応する形で解明することができた。さらに「文章吟味力」を核とした読解力を記述力に発展させていくための教育方法、「文章吟味力」指導をメディア・リテラシー教育に応用することに関する教育方法についても解明をした。

研究成果の概要（英文）：
This research examined PISA test questions for reading comprehension.　Then, on the basis of such investigation, some suggestions were made on the contents and methods of teaching for developing students’ reading skills based on critical text analysis, which should be taught systematically from the upper grades of elementary schools to senior high schools.　The paper also discussed how to develop students’ writing skills based on their skills of critical text analysis and also how to utilize such analysis skills for developing their media literacy skills.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：ＰＩＳＡ型「読解力」、「活用型」学力、文章吟味、批判的思考力、説明的文章の指導過程、メディアリテラシー、ＮＩＥ

１．研究開始当初の背景

(1)2003 年にＯＥＣＤが実施したＰＩＳＡ（生徒の学習到達度調査）の結果が、2004 年に公表された。それにより日本の子どもの学力は「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」などについては上位の国とは統計上の差はなかったが、「読解力」についてはＯＥＣＤ平均程度にまで低下していたことが明らかとなった。ＰＩＳＡ「読解力」には確かに 21 世紀を生きていく子どもたちに必須といえる要素が多く含まれている。特に文章の記述を理解するレベルに止まることなく、書かれた内容から推論をすることを求める問題や、複数の文章を比較・検討しながら、それらを吟味・評価・批判することを求める問題が数多くあった。これらは、阿部が従来から提唱している「文章吟味力」と大きくかかわる。日本の子どもたちの得点が低かったのは、これに関する問題である。文章を受動的に理解・処理するだけの国語学力を身につけさせているだけでは、これからの世界を切り開いていく日本人を育成することはできない。

(2)同時にＰＩＳＡの「読解力」にも限界はある。特に文章を批判するという観点が徹底できていない。文章の優れた点を評価する点にも甘さがある。その他、21 世紀型読解力としては不十分な要素がある。それについても、具体的に解明していく必要がある。

２．研究の目的

本研究では全国の小学校・中学校・高等学校の多くの教師の協力を得て、「文章吟味力」を核とした国語学力を身につけさせるための教科内容・教育方法について、臨床的に解明をしていく。ＰＩＳＡ型「読解力」の先進性を重視しつつ、一方ではその限界を克服するという姿勢で「文章吟味力」を解明していく。また、ＰＩＳＡ「読解力」についての調査結果では、文章の推論・評価・批判にかかわり、日本の子どもたちの自由記述能力の低さも見えてきている。短い記述によって解答する設問には比較的対応できているものの、やや長めの自由記述的解答が求められる場合には無回答であったり、解答が著しく不十分であったりすることが目立つ。このことは、読解力指導と記述力指導を有機的に組み合わせてく必要があることを示唆している。

今回の研究においては、文章吟味力を応用しつつメディア・リテラシー教育の新しいかたちも追究していく。メディア・リテラシー教育の分野では、様々な新しい実践が提案されつつあるが、まだメディアに親しむ、メディアを楽しむといったレベルのものが少なくない。メディア・リテラシー教育では、メディアを比較し評価し批判する力をつけていく必要がある。その分野でも新しい問題提起を行う。

本研究では以下の４点の解明を行う。

(1)ＰＩＳＡの「読解力」問題の分析・検討を行い、それに対応しつつ同時にそれを乗り超える「文章吟味力」を核とした読解力に関する小学校高学年→中学校→高等学校の教科内容を系統的に解明する。

(2) 上記の「文章吟味力」を核とした読解力を子どもたちに身につけさせるための教育方法について、各学年段階に対応する形で解明する。

(3)上記(1)(2) にもとづいて、「文章吟味力」を核とした読解力を記述力に発展させて

いくための教育方法について解明する。

(4) 「文章吟味力」を応用しつつメディア・リテラシー教育の教科内容と教育方法について解明 する。

３．研究の方法

(1)ＰＩＳＡの「読解力」問題とその結果に関する論文・文献を広く収集し分析・検討を行う。さらに、それにかかわる授業方法の提案、実践記録等も収集し分析・検討を行う。

その分析・検討結果とお茶の水女子大学大学院の 21 世紀ＣＯＥプログラムの国語学力調査の分析・検討結果（『ＪＥＬＳ第１集～第６集）とをつき合わせていく。

(2) ここ２０年間の国語科教育の文献・資料中で文章吟味にかかわるものを広く集める。そこにはメディア・リテラシー教育に関する授業記録・文献等も含める。また、文章吟味にかかわる授業をビデオにより記録する。

(3)上記(1)～(2) の検討を行いながら、ＰＩＳＡ型「読解力」に対応しつつ、同時にそれを超える「文章吟味力」に関する国語の教科内容を立案していく。特に小学校高学年～中学校～高等学校の系統化を試みる。

(4)上記(3)と平行して、「文章吟味力」を身につけさせるための授業方法を構築する。通常の説明的文章の読解指導の中に「文章吟味力」の指導を組み込む形の授業方法法、「文章吟味力」の指導に焦点化させた形の授業方法、メディア・リテラシーの授業に組み込む形の授業方法などを検討していく。

(5)上記(4)までの研究を踏まえ、実践化に協力をしてくれる小・中・高の教師とともに、「文章吟味力」を身につけさせるための単元案、授業案を作成する。

(6) 上記の単元案、授業案にもとづいて、実際に授業をしてもらう。授業をビデオに撮影する。ビデオカメラを複数持参し、複数箇所から授業を撮影する。授業後に授業担当教師、授業に協力してくれた教師、阿部による授業検討会を行う。その後大学において詳細な授業の分析・検討を行う。

(7) 上記検討にもとづき単元案、授業案全体を見直し、新しく単元案、授業案を作成する。また、授業方法、教材についての見直しを行う。同時に、読解力と記述力とを総合的に高めていくための授業実践を組み込んでいく。授業記録、その後の検討については、文章吟味力の研究過程とほぼ同じ内容である。

４．研究成果

(1) ＰＩＳＡ「読解力」の 2000 年・2003 年の問題（公表分のみ）について、お茶の水女子大学大学院　ＣＯＥ国語学力検査問題および全国学力・学習調査国語「Ｂ問題」と比較しつつ分析・検討を行った。また、それらの調査結果について、分析・検討を行った。三つの調査問題およびその結果に関する多くの共通点が見出された。共通点は、①文章の論理の流れを構造的に把握する力の弱さ②文章の内容・書かれ方を吟味・評価・批判する力の弱さ　③自分のオリジナルの意見を構築し述べる力の弱さ――である。

一方、全国学力・学習状況調査の秋田県の結果を分析・検討する中で、指導方法、教材、教科内容設定等を改善していくことによって、上記の学力のある程度の部分まで弱さを克服できる可能性も見えてきた。

(2) それらを前提に、「文章吟味力」を核とした小学校高学年～中学校～高等学校の読解力の教科内容案の解明を行った。具体的には、教科内容の体系案、系統案である。特に説明的文章の「読むこと」に関する教科内容を中心としている。

「文章吟味力」の前提として「構造把握力」「論理分析力」が必要となる。それらの読解力にかかわる教科内容の解明も行った。

それはたとえば次のようなものである。

Ａ構造把握の方法（教科内容）

①説明的文章の典型構成を知り、それを指標に構成を把握する。説明的文章の典型構成は、前文・本文・後文の三部。

②前文と後文の役割を把握する。前文の役割には、ａ問題提示　ｂ導入　ｃ前提条件の提示　ｄ結論―などがある。

後文の役割には、ａ結論　ｂまとめ　ｃ新たな問題提示　ｄ感想・付け足し―などがある。

（中略）

Ｂ論理分析の方法（教科内容）―その１

①骨格の段落に着目する。

骨格の段落の性質は、ａ文章の各部分を統括している　ｂそれがないとその部分のメッセージ性が保たれない

②骨格の段落とそれ以外の段落の関係を把握する。論理の関係には、ａ骨格の段落のある用語・記述について骨格以外の段落がくわしく説明をしている関係　ｂ骨格の段落の記述について、骨格以外の段落が補足・付け足しをしている関係

ｃ骨格の段落に骨格以外の段落の内容がまとめられている関係　ｄ骨格の段落の記述について骨格以外の段落が理由・根拠を示している関係　ｅ骨格以外の段落が前提となって骨格の段落の結論を導き出している関係　ｆ対比的な並立の関係　ｇ累加的な並立の関係

（中略）

Ｃ論理分析の方法（教科内容）―その２

①帰納法と演繹法という二つの推理の形を知り文章を読む際に応用する。

帰納と演繹の見分けができ る。

②消去法という推理の形を知り文章を読む際に応用する。

③概念相互の関係性

ａ具体と抽象の関係　ｂ 特殊と一般の関係　ｃ上位（概念）と下位（概念）の関係―などを知り応用できる

Ｄ文章の工夫・レトリックをとらえる方法（教科内容）

①□対比、対応、類比、反復に着目

②□比喩的表現・用語に着目（直喩・隠喩・換喩・提喩・活喩・声喩・転喩・諷喩、象徴的表現など）

③□誇張法、列叙法、援叙法、漸層法、反漸層法に着目

（中略）

Ｅ吟味をするための方法（教科内容）

①語彙・表現を吟味する方法

ａ語彙・表現が妥当かどうかを把握

ｂ語彙・表現に曖昧性・恣意性がないかどうかを把握

ｃ比喩・抽象的な用語・ステロタイプの用語・難解な専門用語に問題がないかどうかを把握

ｄ程度・限定の表現が曖昧・不正確でないかどうかを把握

②「事実」の現実との対応を吟味する方法

ａ「事実」が現実と対応しているかどうかを把握

ｂ「事実」が二つ以上に解釈できて誤解を生じないかどうかを把握

ｃ誤解を与える「事実」提示はないかどうかを把握

ｄ事実」提示に誇張・矮小化はないかどうかを把握

③「事実」の取捨選択を吟味する方法

ａ選ばれた「事実」が妥当かどうかを把握

ｂ選ばれた「事実」に過剰・不足はないかどうかを把握

ｃ選ばれた「事実」に非典型性はないかどうかを把握

ｄその「事実」の具体性・示し方は妥当か

どうかを把握

④根拠・解釈・推論を吟味する方法

ａ根拠・解釈・推論は妥当かどうかを把握

ｂ隠された（見落とされた）推論の前提となる「事実」「法則」「価値観」はないかどうかを把握

ｃ必要条件・必要十分条件を混同して推論をしていないかどうかを把握

ｄ因果関係に問題はないかどうかを把握

（中略）

⑤ことがら相互・推論相互の不整合を吟味する方法

ａ同じ語彙・表現で示されていることがら（事実・概念）相互に不整合はないかどうかをは把握

ｂ同じ対象を指し示すはずの語彙・表現相互に不整合はないかどうかを把握

ｃ解釈・推論相互に不整合はないかどうかを把握

ｄ仮定・相対を、いつの間にか既定・絶対と混同したりすり替えたりしていないかどうかを把握

⑥表現・事実選択・推論などの裏にある考え方・ねらい・基準を吟味する方法

ａその表現・事実選択・推論などの裏にはどういうものの見方・考え方やねらい・基準があるのかを考察

ｂそのものの見方・考え方やねらい・基準は、誰が歓迎し誰の利益につながるかを考察

ｃ筆者はなぜ、どういった理由（事情・条件）からそういった書き方をしたのかを考察

ｄ上記のことも考慮しつつ、その表現・事実選択・推論などは妥当と言えるのかどうかを考察

(3) 上記の教科内容を小学校～中学校～高等学校と系統的に配列し、それにもとづいて、その教科内容を子どもたちに身に付けさせるための教材選択、指導方法について、解明を行った。「文章吟味力」の指導においては、まずは教材選択が重要な意味をもつことが明らかになってきた。全国の教師の協力で多くのモデル的教材が収集できた。また、初期段階の「文章吟味」に関する導入的演習教材が必要であることも判明した。それについても、かなりの教材がそろってきている。読解力を記述力に発展させることについての教育方法についても解明した。それについては、阿部が編集・執筆を行った『国語授業の改革８・ＰＩＳＡ型「読解力」を超える国語授業の新展開』2008（学文社）等で詳細に論じている。

(4) 上記の教科内容試案と指導方法にもとづいて、秋田県、茨城県、埼玉県、京都府等で研究授業を実施した。その結果、上記試案の有効性がかなりの程度証明された。それについては、『国語授業の改革７・教材研究を国語の授業づくりにどう生かすか』2007（学文社）中で附属小学校教諭・熊谷尚氏の授業が紹介されている。この授業では、読解力を記述力に発展させる試みも行われている。また、前記『国語授業の改革８・ＰＩＳＡ型「読解力」を超える国語授業の新展開』2008（学文社）でも、茨城県つくば市茗渓学園中学校高等学校教諭・鈴野高志教諭の授業、京都府京都市立命館小学校教諭・加藤郁夫氏の授業、京都市京都府立命館高等学校教諭・岩崎成寿氏の授業等が紹介されている。なお、全国で阿部の試案にもとづいて実践している教師はかなりの数にのぼる。

(5) 日本ＮＩＥ学会と日本新聞教育文化財団との共同プロジェクトと連携しながらメディア・リテラシー教育、ＮＩＥの指導方法について検討を行った。小学校・中学校・高等学校それぞれに教材選択、教材研究、単元

計画を率端し、全国の小学校・中学校・高等学校で現在授業実践を試みてもらっているところである。なお、この教材選択については、秋田魁新報社をはじめとして新聞社の協力を得ることが出来た。22 年度以降、これらの成果をまとめ発表する予定である。

(6)今後は、これらの成果をさらに発展させ、学習指導要領の見直し、全国学力・学習・状況調査「国語Ｂ問題」の再検討、さらには大学入試の在り方の再検討を進めていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

① 阿部　昇、言語活動を重視した学校ぐるみの取り組み課題―全教科で「言語」に着目した学びを、実践国語教育研究、No.299、査読無 2010、11－12
② 阿部　昇、言語活動の課題は何か・系統性、身につけさせる力、批判―三つの課題、国語教育、No.712、査読無、2009、13－14
③ 阿部　昇、いま求められるのは基礎・基本としての「吟味的読解力」―ＰＩＳＡに学びＰＩＳＡを超える、月刊国語教育、査読無、2009、30－33
④ 阿部　昇、新学習指導要領「国語」をどう読み解くか、国語授業の改革９、査読無、2009、6－17
⑤ 阿部　昇、日本の国語科教育はＰＩＳＡ「読解力」をどのように受けとめるべきか、国語授業の改革８，査読無、2008、5－20
⑥ 阿部　昇、全国学力・学習状況調査・秋田県の結果に関する考察―平成 19 年度「国語」の結果分析と課題、研究紀要（「読み」の授業研究会）、No.10、査読有、2008、6－15
⑦ 阿部　昇、新学習指導要領「読むこと」改訂の長所と短所、国語教育、No.694 、査読無、2008、131－132
⑧ 阿部　昇、吟味・評価・批判という必然性が読み書き関連指導を再生する、国語教育研究、No.433、査読無、2008、4－9
⑨ 阿部　昇、批判・吟味を欠落させたままではＰＩＳＡは超えられない、言語技術教育、No.17、査読無、54－57
⑩ 阿部　昇、言語の吟味という切り口が教科教育を変える、教育方法（日本教育方法学会）、No.32、査読無、2007、122－137
⑪ 阿部　昇、ＰＩＳＡ「読解力」とＣＯＥ国語学力調査から導き出される「読むこと」指導の改革課題、研究紀要（「読み」の授業研究会）、No.9、査読有、21－30

〔学会発表〕（計 4 件）

① 阿部　昇、テーマ指定討論会・活用力（思考力、表現力）を測る：大学入試と学校教育―国語科教育の視点から、全国大学入学者選抜研究連絡協議大会、2010.6. 8、北九州国際会議場
② 阿部　昇、情報読解力を育成するＮＩＥの教育的効果―ＰＩＳＡ型「読解力」に応えＰＩＳＡ型「読解力」を超えるＮＩＥの試み、日本ＮＩＥ学会、2009.11.21、東洋大学
③ 阿部　昇、学力向上のひけつ、鳥取市教育フォーラム・教育シンポジウム、2009.11.8、とりぎん文化会館 梨花ホール
④ 阿部　昇、研究方法システムの構築と学習指導要領への対応、全国教育研究所連盟カリキュラム研究協議会、秋田県総合教育センター、2008.11. 20

〔図書〕（計 6 件）

① 阿部　昇（編著）、木谷光男、熊谷尚、他、一莖書房、秋田大学教育文化学部附属小学校・授業改革への挑戦・国語編、2010、8－19
② 阿部　昇、他（共著）、全国大学国語教育学会（明治図書）、国語学力調査の意義と問題、2010、132－143
③ 阿部　昇、他（共著）、図書文化、「言語力」を育てる授業づくり・中学校、2009、34－45
④ 阿部　昇(単著)、ソフトバンククリエイティブ、頭がいい子の生活習慣―なぜ秋田の学力はトップなのか、2009、203
④ 阿部　昇、他（共著）、白澤社、2008 年版学習指導要領を読む視点、2008、61－74
⑥ 阿部　昇、他（共著）、金子書房、お茶の水女子大学 21 世紀ＣＯＥプログラム・学力とトランジッションの危機―閉ざされた大人への道、2007、47－64

６．研究組織
(1)研究代表者

阿部　昇（ABE NOBORU）
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：80323129